

三斎流 九曜会だより

平成25年(2013年)
5月25日

特集号

発行

三斎流九曜会

会長 小林祥泰

事務局 出雲市今市町53

三斎流観翠庵

道場築五十周年を祝う

道場五十周年記念

お祝いの言葉

観翠庵第四家元

森山 宗浦



本年は、六十年に一度の出雲大社大遷宮の年に当たり、重ねて観翠庵道場が設立されて五十年という記念すべき年となりましたことは、とても喜ばしいことでございます。

この度五十年を迎えるにあたりましては、道場自体の老朽化に伴い、あちらこちらに手を入れ、九曜会の皆様には大変ご負担をおかけいたしました。この五十年の道のりは、決してたやすい道のりでは

なかったことと思います。しかし、過去を振り返れば、それはすべて良い思い出として皆様の胸に刻まれていることと思います。そして、我々はこれから次の五十年に向けて歩み出します。その道のりはもつと険しいことでしょう。我々の子孫が百年、二百年と無事に迎えられるよう今を生きている我々ががんばっていかなくてはなりません。

道場設立からこれまでにご尽力いただいた方々、そして三斎流の道場として利用、管理に携わってこられた九曜会の皆様に心より感謝申し上げます。

昭和三十七年(一九六二)十月に竣工した観翠庵道場は、三斎流の発展振興の拠点、また一般市民への茶の湯の普及の場として活かされてきたが、このたび築五十周年の記念すべき年を迎えることと

なった。これを祝って風薫る平成二十五年(二〇一三)五月二十五日、新緑に映える道場とホテル武志山荘を会場にして、多くのお客様をお招きして記念茶会を開催することになったのである。

記念茶会

日時/平成二十五年五月二十五日(土)

午前九時～午後三時

濃茶席/観翠庵道場 書院

薄茶席/ホテル武志山荘

山茶花の間(二階)

点心席/ホテル武志山荘

富士の間(三階)



現在の正門



建設当時の正門(九号線沿い)

道場築五十年の歩み

和田 貞夫

三斎流の道統 出雲市今市町へ

観翠庵初代森山祥山宗匠は、出雲市今市町に生を受け若年時より茶の湯の修業を志し、松江市普門院にある観月庵において郎庵宗世に三斎流の茶の湯を学んだ。

二十三歳の若さで三斎流中伝の免許状を受けるが、すでに六十人位の弟子がいたので、これを機会に出雲市内の観音寺近くに家を新築し、稽古場を設けて門弟の指導に当たった。

昭和九年（一九三四）祥山二十八歳の時、師の郎庵宗世より極真台子が授けられて三斎流の道統は祥山宗匠へと継承されるが、祥山は観月庵に入らず出雲市今市町に観翠庵を営んで流派の普及に努めたので、茶道三斎流は松江市から出雲市に根を下ろすことになったのである。

昭和十九年（一九四四）十一月、東京で細川三斎公三百十年遠忌が開催され、祥山宗匠は御献茶の御奉仕を行うが細川家御当主護立公は盛會を殊の外お慶びになり、そ

の功により三斎流家元の認可を祥山宗匠に賜ったのである。こうして茶道三斎流は名実ともに出雲市今市町観翠庵に定着する。

道場建設への動き

流派の普及に情熱を燃やす祥山宗匠の熱心な指導のもとに、しだいに拡充し、それを支援する体制も整い後援会や同志の集いの九曜会が結成されるが、これらの活動の拠点となる場が欲しいと関係者から求められていた。

丁度、その頃市内の旧家神田家から茶室を譲ってよいがとの話があり祥山宗匠は喜んでぜひ移築したいと話が進み、観翠庵近くの観音寺境内の森の一角を借りて築草庵をとの計画となった。当時、三斎流の熱心な支援者であった先々代田部長右衛門氏に相談したところ、この際思い切つて研修道場を建設してはどうか、それに必要な木材は自分の山から出そうとの回答があり話は一気に進み道場建設へととなった。

市内渡橋町にある観音寺境

内の森は、市街地には珍しく松や椿の太木に恵まれ静寂に包まれた地域である。道場建設の設計を近所の竹内工務店に依頼することになり工務店の竹内智道氏は、早速京都へ勉強に赴き設計に取り組んだが、その辺の事情について九曜会顧問の直良光洋氏は、次の様に語っておられる。

「祥山宗匠から観音寺の森に市民一般に開放する茶道場を建てたいとの話がなされ、私達翠友会も若干の協力をすることになった。そして道場の設計に入ったが、工務店の設計が気に入らず、祥山宗匠は竹内智道氏等を伴って京都へ赴き、宗匠の案内で五日間、建仁寺・清水寺・高台寺・天龍寺・龍安寺の名席を見学して勉強させられたのであった。設計の当初は、宗匠の独壇場であったが、施工は智道氏に一任された様で工期は満一カ年を要した。」

最初は、一本の大松の横に築庵をとの計画であったが、大松が台風で倒れた為に藪椿の木々の間に建てることになった。こうして試行錯誤しながら昭和三十七年（一九六二）の秋に完工することができた。当初は田園に囲まれた観音寺境内の森であったが、昭和三十七年四月

に観音寺北側に国道九号線が完通して周辺の状況が一変し、設計を変更して道場正門を北方国道沿いに構える事になった。

松浦快芳氏（九曜会顧問）は、建築当時の思い出を次の様に語っておられる。

「築庵は、祥山宗匠自らが縄張りをされ着々と事が進んでいくある日、突然私の小寺に宗匠がおいでになった。茶室の材の一部を峯寺の山で探したいとの仰せであった。落葉を踏み分けて林道を辿り雑木林に入つて枯木・埋もれ木の中から数本を探し出された。又本堂の古い縁板や古材なども選び出された。茶心を以つてすれば山に捨ててある木も台目柱として用を成す、古堂の縁板も茶室の濡縁となつて誠に数希を凝らした真の贅を尽したことになる。これが茶心であると私は学んだ。」

道場の竣工と祝賀記念茶会

昭和三十七年秋、念願の道場が関係者のご苦労とご尽力によつて無事完工することができた。

これを祝つて同年十月、観翠庵道場竣工祝賀記念茶会が細川護貞公の御臨席を得て盛大に開催された。道場の設立は、九曜会員にとつて念願で

あったので一同の喜びは大きく、祝賀の茶会は晴れやかな雰囲気の中で行われた。

道場内の配置を見ると寄付や待合などは、現在と少し異なっている。正門から入つて路地を進むと左手に寄付があり、正面に書院があつて書院横に細川護立公御命名の忘路軒が築かれている。庭に入ると藪椿の森の中に外待合があり、路地を進むと田部長右衛門様御命名の松霞亭が築庵されてあり、隣りに細川三斎公御尊像を祀つた祖堂が設けられている。茶会の当日は、細川家伝来の茶器が席に飾られていて参会者を喜ばせた。

「会 記」

寄付

掛物 不昧公孤蓬庵旅中の歌

香煎一式

書 院

床 細川護立公御筆 忘路

替 中島来章筆 中寿老左鶴亀 三幅対

香炉 青磁玉取獅子

香合 珊瑚南京亀

卓 青貝萬歴年製

台子皆具

本 席

床 印月江 真珠菴極

釜 三斎公御好三標釜

炉 椽 大乘院古材以之造

香合 三斎公御作 宝珠

水指 権兵衛 砂金袋

茶入 渋紙手 不昧公御箱

道場の昔と今



現在の書院



松雲亭蹲い辺りから書院を見る (S37.10)



細川公・田部ご夫妻様を囲んで記念撮影 (S37.10)



祝賀茶会の参席者を待つ道場正門の受付 (S37.10)



現在の外待合いまでの寄付



外待合い (S37.10)



松霞亭から御退席になる両殿下



観翠庵道場へ御案内の祥山宗匠と常陸宮殿下・同妃殿下



十周年記念茶会での野点席



現在の書院玄関



四十周年記念茶会での濃茶席 細川護熙公・護光様

茶盤 光悦 銘龍田川
替 粉引
茶杓 三斎公御作 銘あさじ共筒
建水 木地曲
蓋置 青竹引切
腰掛待合
板額 不昧公客の心得
硯箱 梨地扇面型楓時絵
煙草盆 一閑造
薄茶席 松霞亭
床 不昧公御筆 羽帶西賛

花入 古銅鶴首
花 白椿 銘初霜
釜 古芦屋 銘天子泰平
炉檜 都三条橋杭古材以之作
水指 古備前耳付
棗 三斎公御好 秋夕歌銘直書付
茶盤 左入黒
替 保全 染付四方
茶杓 不昧公御作
建水 浄益
蓋置 白高麗 火屋

祖堂
細川三斎公御尊像
花入 不昧公御作
花 名残花
釜 野備蜀地紋 五郎左衛門
棚 利斎作 宗哲塗 品川棚
水指 古瀬戸
棗 光英 浪鶴時絵
茶盤 松露亭様造 席開拝受
替 志野織部 われもこう
茶杓 少庵 筒原夏
建水 古瀬戸
蓋置 真柴垣 大樋
菓子器 宗哲菊時絵

常陸宮殿下・同妃殿下御光臨

昭和四十四年（一九六九）は、観翠庵にとつて誠に記念すべき光栄極まりない年であった。平成天皇の御弟君にあらせられる常陸宮殿下と同妃殿下が山陰地方御行啓の折に観翠庵道場にお立寄りになり御茶席に御光臨賜ったのである。それは盛夏の八月八日のことであつた。

祥山宗匠の御先導により両殿下は書院玉座にて御休憩され、やがて忘路軒と松霞亭の御茶席にお入りになつて一期一会の茶の湯を満喫されたのである。両殿下におかれては、この茶の湯のおもてなしを殊の外お慶びになつたとのことでお迎えした関係者一同は光栄に浴し感激したのであつた。

道場築十周年記念茶会開催

築庵以後、道場は茶道三斎流の拠点として大いに活用され九曜会員の期待に応えることができた。

昭和四十七年秋、道場設立十周年を迎えて十月二十八日と二十九日の両日に、これを祝つて記念祝賀茶会が道場と観翠庵本宅を会場にして開催されたが、当日は趣向をこらして庭に野点席を設けて参会者を喜ばせた。

特に、この茶席では細川家伝来の什宝の展観が催され、大名物斗々屋の名碗「銘柿の蒂」や丹波茶入「銘小男鹿」など数々の名宝が展示されて参会者一同感激して見入つたのである。しかし、名宝の展示には心労がいろいろとあつた様で横井謙二郎氏（九曜会顧問）は、「記念茶会で今でも、はつきりと覚えているのは、細川様の特別のお計らいで出品して頂いた宝物の展観のことである。宝物をガラスケースの中に入れて書院で展示したが、丹波茶入「銘小男鹿」のすつきりとした姿が今でも目に浮かぶ。そのほか「柿の蒂茶碗」「三斎公茶杓」などが輝いていた。茶会の前日には準備を完了したが、大切なお道具であるので夜は毎日三人

ずつ交替で泊り込んで警備に當つたことを憶えている。」と、その苦勞を語つておられる。

「会記」

書院

細川家什宝展観

掛物 三斎公懷紙

同 三斎公袋袖伝授之書

茶入 丹波 遠州銘小男鹿

替袋 二

茶碗 大名物斗々屋 銘柿の蒂

茶杓 三斎公御作 一庵書付

花入 円乗坊宗圓作 二重切

狩野探幽筆 富士大横物

卓 唐物青貝中央卓

香炉 青磁獅子

脇 交跡大亀写香合 了入造

花 秋草

花入 やつれ古銅花入

濃茶席 松霞亭

釜 三斎公懷紙 細川家藏

炉檜 三斎公御好三標釜

水指 都三条橋杭古材以之作 利斎作

茶入 朝鮮唐津 海老つまみ 松平家伝来

茶碗 古瀬戸 銘錦 小堀権十郎箱

茶杓 御本

茶杓 三斎公御作 銘あさじ

釜 松地紋平丸 浄久造

祖堂 即中斎箱

城樓棚

水指 高取菱形

茶入 古備前 銘福袋

野点席

風炉 古銅朝鮮

釜 算木四方 寒雄造

水指	志登呂
茶入	赤絵南京 松霞亭様拝啓
茶碗	権兵衛
茶杓	観月庵恵海 銘寿
四疊半	
芭蕉翁御賛	呉春筆
床	くずの葉を 表へかえす時雨かな
釜	芦屋団扇山水地紋 ぐさり 唐物
棚	石州好
水指	祥瑞
棗	三斎公御好 野風
蓋置	柴垣 大樋造
野点席	
釜	遠州好七宝紋
水指	古瀬戸
棗	初雁 真作造
茶碗	秋草絵 住右衛門造
茶杓	大和尚作 銘郎ノ友 玄々斎箱
薄茶席	本宅
院	
雪舟筆	達達磨
花	春屋賛
脇	秋草 唐物手付籠
三疊台目	うづら 高取焼置物
普化師之図	長谷川等瑠
床	
花	白椿 古銅花入
釜	芦屋遠山地紋
棗	七宝蒔絵 道恵作
茶碗	黒染了入造
茶杓	小堀十左衛門 歌銘
水指	権兵衛造 観月庵伝来

道場を拠点に茶会開催

出雲市今市町に根を下ろした茶道三斎流は、観翠庵を中心に流派の普及発展に努めるが、九曜会員一同は道場を拠点に精進・研鑽に励み数々の茶会を開催した。

昭和五十年（一九七五）十月十日、秋晴れの下に細川護貞公御夫妻を始め竹田益州老師（建仁寺管長）、田部長右衛門御夫妻、恒松制治県知事等の多数の御臨席を仰ぎ、観翠庵二代森山宗瑞宗匠の三斎流家元相続と祥山宗匠の古稀のお祝いの祝賀茶会を道場と武志屋本店において開催した。

昭和五十二年（一九七七）には、三斎流の隆盛に心血を捧げた祥山宗匠が逝去、その三回忌には竹田益州老大師が導師となつてしめやかに法要が営まれ、道場において観翠庵祥山普済居士追悼茶会が厳粛に開催された。

平成六年（一九九四）流派の振興充実に尽力した宗瑞宗匠が六十歳の若さで急逝、関係者一同は悲しみに包まれるが、細川家より宗瑞宗匠夫人に家元継承の認可が授けられて観翠庵三代森山宗育家元が誕生、祝賀会が開かれた。

平成八年（一九九六）十一月十七日、道場と観音寺書院

において宗瑞宗匠を偲ぶ三回忌追悼茶会が開催され、亡き宗匠を偲んで厳かな中に和やかな茶会が開かれた。

このような記念すべき茶会の他に、年中行事の定期的な茶会である三斎忌・祥山忌・宗瑞忌の茶会を開催しているが、九曜会では毎年春に一般市民の皆様をお招きして藪椿の茶会（後に新樹の茶会）を開催して流派の普及拡大に努めている。

道場築四十年記念事業実施

平成十四年（二〇〇二）は、築四十周年を迎えて祝賀の記念事業が次の様に実施された。

道場改修工事

- ・富士の間拡張・縁の改修
- ・収納庫新設・青竹改修

記念茶会

十一月十七・十八日の両日、細川護熙公・護光様をお迎えして記念茶会が道場と観音寺において盛大に開催されたが、今回特筆されることは近年作陶に取り組んでおられる細川護熙公の御作陶特別展が松霞亭において催されたことである。

床に細川護熙公御筆「本来人」（号不東庵）が掛けられ、花入（信楽）水指（唐津）茶入（伊羅保）茶碗（楽黒）が展示され、祖堂では茶碗（信楽・絵唐津・柿の蒂・井戸・赤染）の名品が拝見できたのである。

道場の一般公開

三斎流と道場を多くの人に知って頂く為に十一月二十二・二十三・二十四日の三日間に市民の皆様を対象とする一般公開を実施したが、二二〇名の見学者があり呈茶でもてなした。多くの人に愛されていることを知り担当者は感激したのであった。

記念誌の発行

この機会に三斎流関係の記録・資料を集録して後世に残したいと後援会の尽力で、三斎流の系譜・観翠庵の道統・思い出の記・今昔写真集等が編さん発行された。

道場築五十周年を迎える

平成二十二年（二〇一〇）十一月、三斎流では観翠庵四代森山宗浦宗匠が家元を道統継承し、新たな隆盛発展の時代に入った。

新しい発展が期待される中で、平成二十五年（二〇一三）永らく三斎流の拠点として活かされてきた道場が、築五十周年という大きな節目の年を迎え九曜会では、次の様なお祝いの記念事業を実施することとした。

道場改修工事

記念茶会（五月二十五日）

濃茶席 観翠庵道場
薄茶席 ホテル武志山荘



忘路軒入口

点心席 ホテル武志山荘

茶会用備品の整備

九曜会だより特集号の発行

三斎流の隆盛発展を期す

細川三斎公を流祖とする茶道三斎流は、縁あって出雲の地に定着し観翠庵において家元の道統が継承されて今日に至っている。

松平不昧公が茶書「むだごと」の中で「本意よく知りたる師匠に稽古したまえかし」と言つて、三斎流の荒井一掌こそが本意になつた師匠であり、この先生について修業・稽古するようにと述べているが、不昧公の言葉どおり茶の湯の本意を貫き継承する三斎流の修業を志す者として、この機会に大いに誇りと使命感を持ち、より一層心して精進・研鑽に励み、流派の隆盛発展に精励していきたいと念ずる次第である。

文中の直良光洋氏、松浦快芳氏、横井謙二郎氏の談話は、先の四十周年記念誌より抜粋して記載したことをお断りして、結びの言葉としたい。